

## 解析対象と統計解析

本報告の解析対象数は平成11年2月から2年間の間に、1年後の健診結果、およびFFQW65への回答の得られた境界型141名（RCTによる割付；新教育群83名中70名、従来型群84名中71名、本期間登録者167名中84%）。

栄養教育を開始後1ヶ月及び6ヶ月に行い、1年後の血糖値および、FFQW65を調査した。負荷後2時間値の開始時点での群間差を共分散分析<>により調整し、教育効果について検討した。

結果 平均年齢は新教育群54.9、従来型群55.2であった。FFQW65から推定した食事ごとの改善指数で見ると、夕食及び1日総エネルギー充足率も新教育群で有意に(ともに $p<0.001$ )改善していた。また、充足率の改善指数と負荷後120分値の変化率の間にも有意な正の関連（スピアマン相関係数0.28、 $p<0.01$ ）がみられ、食事の改善と血糖値の改善との関連性が示唆された。次に本研究のエンドポイントである血糖値について検討した。粗データでは新教育群で1年後に血糖値が低下する傾向があった。しかし、開始時点での負荷後血糖値に差が認められた（新教育群145.6mg/dl、従来型群133mg/dl、 $p<0.001$ ）。

そこで、共分散分析により調整したeffect sizeを検討したところ、有意な低下が認められた（調整済変化率の差と95%信頼区間：-18.0% (-10.4% ~ -25.6%)）。